

オランダ・アムステルダムの旅

運河の濺みに映えるけばけばしいネオンサイン 広場で繰り広げられるパフォーマンス 今宵も妖しい光が人の心を惑わす

13 世紀にアムステル川をダムでせき止めて造られた街…。アムステルダム命名の由来は、そんな分かりやすい事実にある。古くから勇敢な船乗りたちが集った都。そう、そんな荒くれ男たちに不可欠なのが酒と女。世界的に有名なハイネッケン・ビールの本社工場は、この街の郊外にある。見学に行くときごく安いお金で、つまみもビールもしこたま呑み食いできるとあっていつも混んでいる。

そして、女。アムステルダムを世界的に有名にしたものに『飾り窓の女』がいる。これは日本の昔に例えれば、青線・赤線。中心街からほんの数分歩いた運河の両脇に、その店がずらりと並んでいる。ショーウィンドウに入った半裸の女たち。日本語の卑猥な文句が書かれた看板もあった。売春すらも個人の自由で認められている。近年、

アジアからの出稼ぎや旧共産圏からの流入で、女性の質が向上し選択の余地が増えたとは、現地の好事家。

乾燥大麻が堂々と売られている。それ専用の喫茶店すらある。花市場の一角で、大麻草の鉢植えが何気なく売られているのにも驚かされた。これも個人の自由の尊厳なのだろうか。しかし街にはアル中や薬物中毒者が徘徊している。

1944年夏、小さな屋根裏部屋に潜んでいた多感な少女がナチに捕まった。収容所に送られて絶命。そう、アンネ・フランクだ。その狭い部屋を目の当たりにすると、改めて戦争の狂気を考えさせられる。

現在、オランダは安楽死の合法化も含め世界一自由な国と思われている。その自由の裏にある強い自己責任を考えつつ、この街を後にした。



物憂い表情のカフェの女性。



学校帰りの少女たち。



アンネ・フランクの家。



美しい花は市民に人気が高い。



売春街のネオンが運河におちて・・・。



火を吹くパフォーマンス、ダム広場にて。